



神道のお葬式

しんそうさい

神葬祭

神道には、いわゆる教祖も經典もありません。

日本古来からの伝統を受け継いだ民族信仰です。

近年は仏教から神道に改宗する家が増え、神葬祭は増加傾向にあります。…とは言っても神葬祭自体が少ない為、理解が進んでいないのが現状です。

この度、簡易ながら、神道のお葬式「神葬祭」についてまとめましたので、これを通じ、日本人古来の死生観等についてより理解を深めて頂ければ幸いです。

神葬祭とは？

神社の神職が神道の形式によって行なうお葬式のことです。

「古事記」や「日本書紀」には、仏教伝来以前から存在する日本古来の死生観が記述されており、神葬祭やその後の祭事に受け継がれています。

てらうけ

寺請制度

仏教伝来以降は、公家を中心に信仰されましたが、神仏習合により、一般にも普及することになりました。

江戸時代になると、幕

府によるキリシタン対策の一環として「寺請制度」(檀家制度)が実施され、全国どの家も必ずどこかのお寺の「檀家(門徒)」に属すことが決められました。

この徳川幕府の出した制度により、仏式のお葬式が定着していった為、現在に至るまで、神道にお葬式があること自体を知らない方がほとんどだと思えます。



日本人の死生観

日の本に
生まれ出でにし

益人は 神より出でて
神に入るなり

中西直方『死道百首』より

この歌は、「祖先の神々から出た靈魂は、この世で一生を終えると、祖先の神々の元へ帰っていく」という意味で、日本人の死生観を表しています。

したがいまして、人の御霊(みたま)は、極楽浄土など遠い世界に行くとは考えられていません。

人の御霊は、死後一定の期間を過ぎると清められ「祖霊(そらい)」となり、

一家の守り神になると考えられています。

そして、お正月や中元(お盆)、節目節目の年祭(法事・法要)等の際には家族や子孫のおもてなしを受け、より強いお力で見守ってくれるようになるかと考えられています。

このような日本人古来の考え方が神道に息づいているのです。

神葬祭の流れ

一、 帰幽奉告祭きゆうほうこく

神職により氏神さまに故人の死を奉告します。また、家の神棚の正面には白半紙を貼り、五十

日祭(忌明け)までお供えは控えます。



↑ 神棚封じ

一、 通夜祭

通夜祭は本来蘇りを願うための儀式でした。

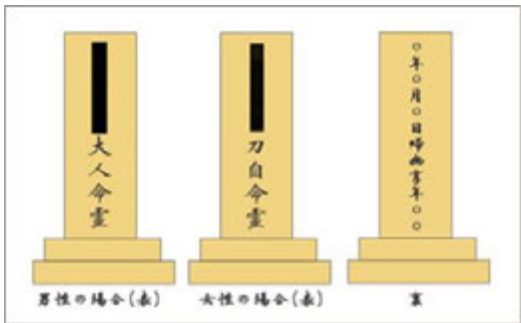
通夜祭では、神職の祭詞奏上や参列者の玉串拝礼が行われ、生前の好物等を供えご家族と共に最後の一夜を過ごします。尚、上記の帰幽奉告祭は、通夜祭の始めに行なう場合も多いようです。

一、 葬場祭そうじょうさい

故人に対し最後の別れを告げる儀式です。

遷霊の儀により故人の御霊を霊璽(れいじ)に遷し、神様になられる準備をします。

その後、神職の祭詞奏上や参列者の玉串拝礼が行なわれます。



↑「霊璽(れいじ)」※仏教でいう位牌にあたる



一、**帰家祭**きかさい

火葬を終えた故人の遺骨が家に帰り、霊前に葬儀が終了した旨を奉告します。その後、神職が家の中のお祓いをします。

一、**五十日祭**まで

十日祭(仏式の初七日にあたる)から十日ごとに祭事が続き、五十日祭(仏式の四十九日にあたる)で忌明けとなります。

この五十日祭の祭事を経て、霊璽は祖霊舎に祀られる事となります。

一、**埋葬祭(納骨祭)**

墓地や納骨殿に遺骨を納める儀式です。忌明けの五十日祭の後、行なわれます。

その後

五十日祭が終わると、一年祭、三年祭、五年祭、十年祭、また十年祭以降は、十年毎に祭事が続きます。

一般的には五十年祭で『まつりあげ』(仏教でいう弔いあげ)をして、その後は子孫のみならず、郷土の守り神とされます。ちなみに御手洗神社では、三十年祭以後はいつでも、まつりあげして良いという考え方です。



中元祭

中元(ちゅうげん)祭とは、仏教でいうお盆と同じで、神道でも八月中旬に祖霊を迎えてお供え等でおもてなしをします。

神道では亡くなって最初の中元祭を「初中元祭」といい、神職が祭事を作り行ないますが、二年目以降の中元祭は家族だけでお供え・お参り等をして頂いて結構です。ちなみに仏教には元々、祖霊があのでこの世を

↑「**祖霊舎(せいらいしゃ)**」

※大・小様々な様式・形がある。
※仏教でいう「仏壇」にあたる。

行き来するということ考え方はありません。

現在の「お盆」は、仏教の「盂蘭盆会(うらぼんえ)」から来ていると説明されがちですが、盂蘭盆会は「餓鬼道(飢えの世界)で苦しむ先祖を救う為の法要」ですので、これを起源にすると、仏教の供養では、必ずしも極楽浄土に行ける訳ではないという事になってしまいます。

実際には、仏教伝来以前の日本古来の信仰である「みたま祭(魂祭)」が元々の起源です。

春季 祖霊祭

仏教でいうお彼岸です。春秋に自然や祖霊に感謝し、ご加護を仰ぐ日本古来の信仰が、仏教に影響を与えました。

事実、日本以外の仏教国（インド、中国等）で、先祖供養をお彼岸に行なう風習はありません。

皇室では春分・秋分の日に天皇陛下自ら「皇霊祭」と呼ばれる皇室の祖霊祭を、宮中皇霊殿にてとり行なっております。

この時季にご先祖さまを偲び、感謝の気持ちで祖霊舎やお墓にお参りするのが良いでしょう。

質疑応答

Q 仏教でいう、戒名はある？

A 神道では、諡名（おくりな）というものがあり、一般的には姓名の下に「命（みこと）」をつけますが、諡名は性別や年齢等によって変化します。

例「山田太郎大人命」

※神道では、いわゆる戒名料のようなものはありません。上も下も無く、皆等しく諡名が授けられます。

Q 神道も「檀家」と呼ぶ？

A 神道では「檀家」と呼びません。「神徒（しんと）」と呼ぶのが一般的です。

氏子（うじこ）と使い分けする場合はほとんどです。

Q 神道に改宗するには？

A、神道には教祖・経典も無く、改宗といっても特に大きな決まり事はありません。仏壇がある家でも祖霊舎を置くことが出来ます。改宗をお考えの方は一度当神社までご相談下さい。

Q 神道のあの世は？

A、神道ではこの世を「現世」（うつしよ）、あの世を「幽世」（かくりよ）と呼びます。御霊は現世と幽世を自由に行き来し、中元祭や祖霊祭等、折々に子孫からおもてなしを受けます。祖霊は最終的に神となり、高天原（たかまのはら）という神々の住まう世界で安らかに過ごされると考えられています。

おわりに

神道には日本古来の信仰が息づいています。

今回は神葬祭を中心に紙面の限り書かせて頂きましたが、より詳しく知りたい方は、当神社までご連絡ください。

御手洗神社

大分市松岡6033番地
097-520-1863 / 1635